

令和3年度（2021年度）熊本県総合教育会議 議事録

期 日：令和3年（2021年）10月25日（月）

時 間：10：00～11：30

場 所：県庁本館5階審議会室

出席者：熊本県知事 蒲島 郁夫

熊本県教育長 古閑 陽一

熊本県教育委員 木之内 均、吉井 恵璃子、田浦 かおり、

田口 浩継、西山 忠彦

議 題：「熊本県教育大綱・第3期教育プランを踏まえた施策の取組状況と今後の方向性」

【井藤 教育政策課長】

それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和3年度熊本県総合教育会議を開催します。私、事務局を務めております教育政策課長の井藤です。どうぞよろしくお願い致します。

なお、本日の進行は古閑教育長に務めていただきます。それでは、古閑教育長よろしくお願ひします。

【古閑 教育長】

はい。それでは本日の進行を務めさせていただきます、教育長の古閑でございます。よろしくお願ひいたします。

この熊本県総合教育会議につきましては、知事と教育委員会が十分な意思疎通を図りまして、本県における教育課題を共有するとともに、より一層民意を反映した教育行政を推進できるよう、実施をしているものでございます。

それでは、議事に先立ちまして、最初に蒲島知事の方から御挨拶をお願いしたいと思います。

【蒲島 知事】

皆さんおはようございます。本日はご多忙の中お集まりいただき、誠にありがとうございます。熊本県総合教育会議の開催にあたり、一言御挨拶申し上げます。

教育委員の皆様には日頃より本県教育行政の推進に多大なる御尽力をいただき、心から御礼を申し上げます。

平成27年度に始まったこの会議も、今回で8回目となります。昨年度の会議では、「熊本県教育大綱」について、意見交換をさせていただきました。会議でのご意見を踏まえ、今年3月に大綱の改定を行ったところです。

今回は、「県教育大綱・第3期教育プランを踏まえた施策の取組状況と今後の方向性」を議題に協議させていただきます。

新型コロナウイルスの影響によって、子供たちの学習環境は大きな制約を受けました。

しかしこのような困難な状況にあっても、未来を担う子供たちが、決して夢を諦めることのない環境を整えていくことが、私たちの役割だと考えています。

そして本日協議いただく内容は、いずれも、そうした教育環境を整えるために必要なものであります。

私は、子供たちの可能性を大きく広げるための多様な学びの場を提供し、「夢を育む・支える」教育、そして「誰一人取り残さない」教育を実現したいと考えています。

教育委員の皆様には忌憚のない御意見をお聞かせいただければ幸いです。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【古閑 教育長】

ありがとうございました。

本日御出席の皆様の御紹介につきましては、席に配布しております出席者名簿をもって代えさせていただきたいと思っております。

次に、本日の会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の規定に基づきまして、公開とさせていただきたいと考えておりますが、それでよろしいでしょうか。（はい。）

はい、ありがとうございます。それでは本日の会議は公開とさせていただきます。

それでは、早速議事に移らせていただきます。

今年度は、「熊本県教育大綱・第3期教育プランを踏まえた施策の取組状況と今後の方向性」と題しまして、皆様と意見交換をしたいと考えております。

本日の議事の進め方につきましては、テーマを大きく3点に整理をいたしております。テーマごとに、目安として、事務局から5分程度、資料の説明を行いました後に、皆様から20分程度、意見交換をしていただく流れを進めていきたいと考えております。また、最後には全体を通して、三つのテーマ以外も含めまして、広く御議論いただければと考えております。

それでは、一つ目のテーマでございます、「誰もが通いたい『安全・安心な学校』づくり」につきまして、事務局から資料の説明をお願いいたします。

【井藤 教育政策課長】

教育政策課でございます。それでは、一つ目のテーマである「誰もが通いたい『安全・安心な学校』づくり」について御説明いたします。

資料の1ページをご覧ください。まず、上段左側の安全・安心な学びの環境づくりについてです。ここでは、安全・安心な学びの環境と、子供たちを支える魅力ある学校施設、これを将来像としてしています。

学校施設の課題として、築40年以上の建物が約半数と、老朽化が進んでおり、また、多様な生徒に対応するためのトイレ改修等のバリアフリー化の推進も必要となっております。さらに、全国的な空調の公費化の流れの中、本県は保護者負担となっており、公費化を検討する必要があります。

現教育プランの計画期間の最終年となる2年後の目指す姿は、コスト平準化も含めた長寿命化改修の計画的な実施やトイレ改修等のバリアフリー化、また、空調設備の公費化等

が着実に進んでいる状態でございます。

次に、右側のいじめ・不登校への対応についてです。ここでは、不登校の児童生徒が支援を受け、社会的自立を目指すことができ、また、いじめを受けた児童生徒が誰かに相談し解決できること、これを将来像としています。

課題として、不登校児童生徒への専門家からの支援が不十分、いじめを受けた児童生徒が誰かに相談できていない、また、ヤングケアラーの実態把握と支援が必要となっております。2年後に向けて、専門家等による支援の充実や、組織的な対応を進めていきたいと考えています。

続いて、下段の取組みの方向性についてです。1の安全・安心な学びの環境づくりとして、令和3年3月に策定した「熊本県立学校施設長寿命化プラン」に基づき、(1)の長寿命化改修の計画的な実施や、(2)のエレベーター設置やトイレ改修等のバリアフリー化の推進、また、(3)にありますように、空調未設置校への設置検討や公費化に係る学校運営費の拡充検討などを進めたいと考えています。2のいじめ・不登校への対応では、スクールカウンセラーの活用ということで、教育事務所への配置拡充の検討や特別支援学校への追加配置の検討を行うほか、スクールソーシャルワーカーの活用では、ヤングケアラーへの対応や県全体の相談時間の拡充検討などにより、支援体制の充実を進めていきたいと考えています。また、右側のアスタリスクのところに記載しておりますように、医療的ケアや人工呼吸器の装着が必要な特別な支援を要する児童生徒への対応や、土木部・県警本部と連携した、通学路における安全安心の確保についても、しっかり取り組んでいきたいと考えています。

最後に、資料の4ページをお願いいたします。資料の4ページには第3期教育プランにおける関連指標の動向について記載をしております。なお、各指標の中で、直近の動向がわかる指標については、右から2列目、直近の動向の欄に記載しております。これまで説明して参りました、一つ目のテーマに関連する指標は、上二つの指標となっており、上から二つ目の、「不登校の児童生徒が、教職員だけではなく、専門家からの支援を受けている割合」については、直近で81.2%という数値が出ています。目標値である100%の達成に向け、専門家からの支援について、しっかり取り組んでいく必要があります。

「誰もが通いたい『安全・安心な学校』づくり」に関する事務局からの説明は以上でございます。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございました。

それでは、委員の皆様、知事から自由に御意見をいただければと思います。よろしくお願いたします。

【田口 教育委員】

失礼します。

【古閑 教育長】

はい。

【田口 教育委員】

いじめ不登校への対応についていろいろ御検討いただき、実際取り組んでいただいていることを本当に感謝いたします。

資料の4枚目にありましたように、2段目ですね、不登校児童生徒が専門家からの支援を十分受けていないという状況なんです、文科省の調査、熊本県の調査から明らかなように、不登校の生徒さんがどんどんどんどん増えていっております。それに対して、専門的な医療機関ですね、教育支援センター等の数が十分なのか、その不登校の児童生徒さんに応じた施設を、今準備できているかどうか、非常に不安に思うところがあります。熊本市内のある支援センターから聞き取ったんですが、相談が毎日電話で寄せられると。ただし、きちんと相談活動ができるのは、4ヶ月待ちだとお聞きしました。今、本当に困っているお子さん、保護者の方が4ヶ月間待たないといけないという状況、併せて、医療機関でも不登校に対する支援をしてくださっておりますが、ある病院では、もう新規の受け付けは現在行っていないときっぱりおっしゃるようで、今抱えておられる、対応しておられる不登校のお子さん方で手一杯であると。そういう状況がある中、教育委員会は一生懸命やっておられる、学校は一生懸命やっておられるんですが、それ以外ですね、福祉関係の部分の対応が十分であるのかということについて、御意見をお聞かせいただければと思います。

【古閑 教育長】

事務局の方から、補足といいますか、状況の説明等がありましたらよろしく願いいたします。

【野崎 学校安全・安心推進課長】

はい。学校安全・安心推進課でございます。ただいま委員の方からございましたように、現在、学習支援センターにつきましては、県内34ヶ所に設置をしているところでございます。本県も、国等の補助を受けながら推進に努めているところではございますが、昨年度は荒尾市に一つ設置をしまして、今年度は、南関町に支援センターを設置しております。その他の連携等につきましても、フリースクールにつきましては、本課で今確認ができていますので16校に、県内の生徒が通っているという状況を確認させていただいております。それで、不登校の児童生徒につきましても、文科省の通知にもございますように、他の機関との連携も進めながら、現在取り組んでいるところでございます。また、専門家からの支援が受けられていないというところにつきましては、先ほどデータ等も出ておりますが、教育事務所単位で、数値が異なっているところがございます。ただ、カウンセラーとの面談時間の希望数等が多くて、なかなかそこでカウンセリングを受けることができないということも聞いておりますので、それにつきましても、解消に向けて今後努力を続けて参りたいと思っております。以上でございます。

【古閑 教育長】

木之内委員、お願いします。

【木之内 教育委員】

今の点なんですけど、僕も完全な数字を把握しているわけじゃないけれど、大体 2,000 名ぐらいいるだろうというようなお話を聞いたような記憶があるんですけど、これがほとんど毎年数が減ってない、横ばいかちょっと増えているぐらい、というように記憶しております。

心の問題を、今いじめと一緒に書いてあるんですけど、例えば不登校になる理由、これが必ずしも僕はいじめだけではないだろうなとも思っておりますし、いろいろな環境の問題も含めた要因があると思います。その辺がある程度把握ができていいのかどうか。やっぱり原因がきちっと掴めてないと、必ずしも専門家のソーシャルワーカーの方々だけに頼っていて、その数を減らせるのかというのがちょっと、僕としては疑問に思っているところです。学校時代に不登校になった形になると、やはり社会に出てからも、よく言われているひきこもりみたいな形になって、社会的な損失というかですね、これは非常に大きいと思います。やっぱり生き方の多様性も含めて、学校対応としてはですね、やはり何ヶ月も待ってとなると、重症化しちゃうとか、なかなか出てこられなくなるということを考えると、やはり地域行政も含めて、一般のいろいろな民間の機関なども含めてですね、何か、教育委員会だけではないような中での連携体制みたいなのを少し、早めに検討をして、根本的にどうしたらいいかというのを検討した方がいいかなという気がします。特に、なかなかずるずるずるずるなくなってしまって、例えば学校をちょっと変わってみるとか、例えばちょっとしたその学び方の、学校に通う時の仕組みを早めに変えていけば、それが何となく出てこられるようになるのかとか、そこら辺がどうしても。以前教育委員会の中でお話がありましたけど、例えば行政の区切りによって、転校がなかなか難しいとか、やっぱりそういったこと辺りの、制度的な中での対応の遅れみたいなものが果たしてないのかどうかとか、こういったことを、この不登校については、ぜひ力を入れてその辺の根本的な解決方法を探っていくべきじゃないかなと。どちらかという、いじめの問題については、いろいろな方策がいくつも見えてきているんですけど、不登校については、ちょっと全体として遅れ気味というか、ちょっと置き去りになっているのかなというのを、感覚で言って申し訳ないですけど、思いますので、ぜひそういったところを、御検討も含めてお願いしたいなと思っています。

【古閑 教育長】

他に、委員の方。はいどうぞ、西山委員。

【西山 教育委員】

今、皆さんがおっしゃったようなですね、対応しながら、ひきこもり・不登校の対応をお願いしたいと思いますが、もう一つは逆の発想で、不登校でもいいじゃないかというようなことで、不登校でもその学力がつく、勉強できる、あるいは、資格化。義務教育の資格が、どういう形で、高卒の資格はあったと思うんですけど、義務教育がどうなっているのかわかりませんが、やはり不登校でも学力がつくんだというふうな、後で I C T のお話がありますけども、やはり I C T 辺りを整備して、自宅でも、しっかりその学校に行

く以上の学力がつくんだというふうな対応をするのも、もう一つの手立てだと思えます。

不登校の中には、先ほどおっしゃいますような、福祉的な部分もあるかもしれませんが、例えば今、山の中の一軒家ですか、山の中で暮らしている人がいますけど、非常に生き生きとして。ああいう人たちが学校に通うのはなかなか大変だろうなど。逆に言うなら、そういう自然の中で、学力がついていくというふうな生き方というものもあるんじゃないかなと思いますから。不登校でも学力がつく、あるいは資格を取得できる、そういったインフラといいますか、ハードはそろってきていると思いますんで、ソフトの開発に向けて、力を入れていけばいいなあと。そういうことをやることによって、先ほど社会に出てのお話もありましたけども、やはり学力があって生きる力があつたら、社会が認めてくれますし、必要としますんで、その人の生きがいというものもまた新たに出てくると。そういう形で、いずれにしても登校いただくのが一番いいんですけども、登校しなくても勉強できると、勉強できて自信ができてまた学校に行くと、みんなよりもできるじゃないかということで、そういう方向での解決策も考えていただければ大変ありがたいなというふうに思っております。以上です。

【古閑 教育長】

他に、委員の方。どうぞ吉井委員。

【吉井 教育委員】

この数年の間に安全・安心推進課ができて、そして、各学校に情報集約担当者ができたこと、とても私はいいことだと思っています。これがあるかないかで大きな違いがあります。これがあると、ひょっとしてここに相談すればいいのかなという子供たちに安心感がまず出たのではないかなと、私はとても喜んでおります、どうもありがとうございます。

でも、この情報集約担当者が、有名無実化するか、本当に生きた制度になるかというのは多分これからだと思います。今、情報集約担当という名前になっていますが、これは名は体を表すで、そのまま考えたときに、ただ情報を集めて、こういういじめがあつたようでしたよ、この子がちょっと不登校になっているようですよという情報を集めるだけでなく、本当の仕事は、いじめの原因を探ることと、いじめを受けている、あるいは不登校になってしまった子供を救うことです。そこを誤解というか、狭い解釈でないようお願いをしたいと思います。ただ情報を集約するのではなく、できることならば私は、いじめ担当、不登校担当という名前に変えていただいた方が、本当の仕事、役割がはっきりすると思います。今のところ情報集約担当者になっておりますけれども、決してそれだけではないということをその担当の方あるいは学校に、はっきりと御指導いただければと思います。そして、学校の先生方だけではない、子供たちに対しても、「とりあえずこの先生に相談してみて」「何かあつたらこの先生を頼ってみて」と、今言っていただけのように、そして子供たちも、「私はあの先生に相談すると何とかなるのかな」と、そして、「できれば他の人に知られないように相談できるのかな」という、そういう状況を作っていただくことがとても大事ではないかと思っています。また、資料の方で、「いじめを受けた児童生徒で、誰かに話をした、又は自分で解決できると答えた割合」という項目がありますが、誰かに話をすれば解決する可能性が高くなります。でも、自分で解決できるというのは、とても

カッコいいことのように聞こえますが、本人にとっては相当な苦痛だと思います。自分は強いんだ、自分は強いんだと思うのはそれはとてもいいことなんですけど、できるだけ人に相談をすること。確かにこれはカッコいいんですけども、我慢をする必要は多分ないと思います。誰かに相談して、早く楽になってくれるように、早く自分の居場所を見つけてくれるようになって欲しいと思います。そういった御指導がいただきたいです。相談をしてから何ヶ月も待たされるという話もありますが、まずは相談をすること。そして、相談を受けたときに、すぐに動ける体制を作るのが私たちの義務だと思います。最初は、まず相談をしやすいこと、情報を集めやすいこと、それを関係者で共有してすぐに対応できること、これを集中的にやっていただきたいと思います。まずは早く対応して、その子供の一番つらい時期を早くできるだけ短くしてやりたい。これが精一杯の、まず私たちがしなければならぬことではないかなと思います。はい、以上です。

【西山 教育委員】

もう一つよろしいですか。

【古閑 教育長】

どうぞ、西山委員。

【西山 教育委員】

今のお話でいじめの部分は非常に大きな問題だと思いますし、また対応もそうですけど、やはり煙が出たときにいかに早く察知するかという部分で、カウンセラーやソーシャルワーカー、ヤングケアラー等対応いただいていると思うんですけども、例えば我々の企業で言いますと、私クボタですけど、クボタグループでホットラインがあるんですね。電話番号があってそこに何か問題があったら電話しなさい、そしたらその担当が、弁護士を介したり、いろんな対応してくれるんですけども。そういった意味合いで、例えば安全・安心な学校づくりホットラインかなんかという電話番号をみんなで共有して、その学校でもその電話番号はわかる、家庭でもわかる。ですから何かあったときには、まず地域でもわかる。何かあったときには、安全・安心な学校づくりのためのホットライン、そこにどんどん注文なり、そういう課題なりを挙げていただいて、それを一つずつ解決しながら、そういう安全・安心なということを具現化できたらいいなと思いますし、また、そういうものがあることによって、こういうとまたあれですけども、いじめる側にすれば、牽制球を投げていることになりますんでね。それぞれのところで対応されるのも、非常に大事なことだと思うんですけども、もう一本ストンとホットライン制度か何か作っていただくと、何かあったら誰でも電話できるということで。あとはそれは専門家ですから、誰から言われたとか、そういう情報は開示しませんので、みんな安心して電話できると。そんなホットラインも考えていただくと大変ありがたいなというふうに思いました。以上です。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございます。田浦委員、お願いします。

【田浦 教育委員】

昨年、お願いさせていただきました、学校におけるセクハラについては大変熱心に取り組んでいただいております、大変感謝いたしております。ちょっと想像で物を申し上げますけれども、不登校に関しては、その外の世界に対峙できる状況ではない子供が、内面が癒えるのを待っているというか、なんかそんな感じがします。その間でも学びを止めないということは非常に重要なことで、子供たちも自分の将来に対して、勉強が遅れることとか、将来自分がどうなるかということに対してすごく不安を感じていると思いますので、その点で先ほどおっしゃっていましたように、学びを止めないという方法があるということは、非常に子供たちにとっても、将来に対して自信を回復できる手段になるかなというふうに思います。

私がちょっと今回お願いしたいことはいじめに関してなんですけれども、多分、文科省の通達で、いじめの問題に対して、警察との連携をするということがあったと思います。昨今ですね、他県ですけれども、子供たちがいじめを受けて自殺するという事件がありましたけれども、大人にも考えがつかないような、陰湿ないじめというのが子供の中であっている場合があるなというふうに感じました。その場合、学校の先生の手には負えない状況というものもあるんだろうなと思いますので、その際に、ぜひ警察と連携するということができるということをもっと広く周知したいなというふうに思っております。セクハラについてもどういうことがセクハラに当たるのか、そういうことを受けた場合にどういう対処が適切なのかという方法を学ぶということが、非常に大事だろうと思うんですけれども、いじめについても同じことがいえるかなと思っていて、他人の命とか、体とか、財産に対して危害を及ぼすということは犯罪であるということをもっと子供とか保護者にも教育する必要があるのかなというふうに思います。具体的にどういうことが犯罪に該当するのかとか、行為の内容ですね。また、そういう行為を受けている場合には、記録を残すとか、警察に相談する上で助けになるようなことも内容的に教えていただければなと思ってます。スクールサポートスタッフとして警察の方も入ってらっしゃるようですので、啓発活動とかもっと、こういうことを行っているということも、たくさん周知していただきたいなと思います。学校が手をこまねいているうちに子供が死ぬことをぜひ防ぎたいと思っているので、警察に相談することもできます、そういう際にはこういうことがその手助けになりますということも、もっと保護者とか子供たちに教えていただきたい。それが、自分が行っている行為が、いじめに、犯罪に該当するかなあというふうに考える機会にもなるかなと思いますので、ぜひ積極的に警察との連携ということに取り組んでいただければと思います。以上です。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございます。他はよろしいでしょうか。

ソフト面について、いじめ・不登校についての御意見でしたけど、ハード面について何か委員の方から御意見等ありましたら。木之内委員、お願いいたします。

【木之内 教育委員】

学校が、老朽化も含めて、設備をやっていくというのはすごく重要だなあと思っており

ます。ぜひどういう順序ですとか、その辺のところは非常に難しいところだと思いますけど、計画の方、検討になってますんで、できるだけ早めに計画案がきちんと出てくると、それぞれの学校辺りも安心感があるんじゃないかなというのを感じます。その中で一つ、エレベーターの設置、これももちろんいろいろ障がいを持たれているお子さんがいたりとかあれば、当然必要と思うんですけど、子供に本当にエレベーターが要るのかなという気もするんですね。なぜかという、我々もそうなんですけど、できるだけ歩きなさいと世の中言われているのに、エレベーターがあったら、やっぱりついつい乗っちゃう。だから、子供のときに特にできるだけ動くことをしてないと、後で大変なんじゃないかなと思うんで、それはもちろんバリアフリーも含めた、福祉的な観点からつけることは当然かなと思うんですけど、付けたときに、ある程度規制じゃないですけども、本当に必要ない人がやたら乗るような形にならないようなことをぜひ考えた上で設置する方が、長期的には子供たちのためになるんじゃないかなと個人的に思いますんで、考えていただけたらなと思います。

【古閑 教育長】

ありがとうございました。どうぞ、田口委員。

【田口 教育委員】

高校の改修、改築に関連してですが、高校の生徒数はどんどんどんどん減少しており、それに対応した、その分量、エリアがあるのかなというふうにも思っています。そのまま残してしまうと、結局その維持管理にもまたお金がかかるというので、大学もそうなんですけど、減築というのも含めて検討しています。熊本県の場合には、県立の高校の敷地内校舎を使われて、特別支援のお子さん方がちょっと増えてしまって、そこに分室分校を作るというように、他の目的への転用を上手にさせていただいておりますので、その辺りですね、減築と他への転用も含めて御検討をいただいた方がいいのかなというふうに思っております。以上です。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございました。他はよろしいでしょうか。

大体テーマの時間も来ておりますので、特に不登校に関しては、委員の皆様方から、やはり福祉とか医療とかの関係機関との連携についてお話がありましたし、また不登校も、いろんな要因が複雑に絡んで、不登校になっている児童生徒が増えておりますので、そういった意味での関係機関との連携とか、あとICTを活用した学びの保障、そういったものもしっかりと取組みを進めていければというふうに思っております。

また、いじめに関しては、やはり早期対応、また未然防止に向けて、ホットラインのご提案とか、警察との連携とか、情報担当者の役割とか、そういったものを含めて、やっぱり広く生徒、保護者にも周知を図るというような御意見だったかというふうに思っております。また、施設についても、減築のお話とか、エレベーターの運用面での活用とか、そういったお話がございましたので、そういった面もしっかり踏まえながら、今後取組みを進めていきたいというふうに考えています。

それでは、二つ目のテーマでございます、「夢の実現に向けた『誰一人取り残さない学び』の推進」について、事務局から説明をお願いいたします。

【井藤 教育政策課長】

はい、それでは二つ目のテーマである「夢の実現に向けた『誰一人取り残さない学び』の推進」（～貧困の連鎖を教育で断つ～）」について御説明します。

資料の2ページをお願いいたします。

まず、将来像ですが、すべての子供たちが「学ぶ意味」を問いながら、「能動的に学び続ける力」を身に付けること、また、誰もが自らの夢に向けて挑戦できるよう、学びを保障し、「確かな学力」を育成することを目指しています。

課題としては、中学校に上がると、数学、英語で正答率3割未満の生徒の割合が増加し、中2では約2割に達します。また、貧困を背景とする学力格差は、小学校低学年時点で存在するということが挙げられます。右側の表とグラフは、これを示すものであり、小学校の早い段階から、誰一人取り残すことなく、学べる環境を整備し、学力を保障することが重要です。2年後には、全国学力調査の全5教科で全国平均を上回ること、正答率3割未満の割合を2割減らすことを目指します。

続いて、下段の取組みの方向性についてです。まず1の学びの保障についてですが、(1)にありますように、小学校低学年において、きめ細かい指導を行うための学習支援員の配置に加え、地域での学習を支援する取組みとの連携強化を図り、1人親世帯や生活困窮者等の子供たちが学習できる環境を整備したいと考えています。また(2)にありますように、夜間中学の新設を検討します。次に、2の学力向上についてです。(1)ですが、熊本の学びステップアップ研修ということで、小学校低学年等の基礎学力定着を図る授業改善などの実践的研修に取り組みます。また資料右側の(3)にありますように、学力向上アドバイザーの派遣・支援の強化ということで、重点支援地域において、課題解決に向けた助言・支援を行うアドバイザーの派遣の拡充ですとか、また、(5)ですが、児童生徒の学力向上に向け、教員の指導力向上をリードするスーパーティーチャーの増員などの取組みを進めたいと考えています。

最後に、資料の4ページをご覧ください。今御説明しました、二つ目のテーマに関連する指標ですが、上から三つ目と四つ目の学力向上関係の指標と、五つ目の「生徒が英語力を身に付けた割合」、それから、一番下の「学校における情報化が先進的である地域の数」になります。このうち、上から三つ目の小中学校の「児童生徒の学力が向上した割合」については、直近の実績値が出ており、4項目のうち1項目で、全国平均を上回っています。なお、上回っている1項目は、プランの策定時から変わらず、小学校の国語となっています。各指標の目標達成に向け着実に取組みを進めて参ります。「夢の実現に向けた『誰一人取り残さない学び』の推進」に関する事務局からの説明は以上です。

【古閑 教育長】

はい、それでは、また皆さんから自由に御意見をいただければと思いますので、よろしくお願いをいたします。田口委員お願いいたします。

【田口 教育委員】

熊本大学教育学部に所属しておりますが、うちの学生さん達が、週に2回ですね、美里町の公営の塾で活動しており、昨年、今年はできなかったんですけど、小国町でも中学校3年生に夏休みに学習塾を提供したり、そして益城プロジェクトとしまして、仮設住宅にお住まいの方で、集会場を利用させていただいて、夜に学習の支援活動もやっておりました。そして昨年度だけになりますが、球磨中学校で遠隔による学習支援ですね、ZOOMで結んで、大学生と中学生が対話しながら学習をするという、そういう活動をさせていただいておりますが、そこで学んでおられるお子さん方ですね、地方に住んでいるお子さん方がすごく素直で明るくて、とても良い子だというふうに学生は言っておりました。

ただちょっと不安に思うのが、進路についての描きがないと。ここに夢に挑戦となっておりますが、夢をしっかりと持っているか、自分はどんな仕事に就くのか、どんな人生を目指すのか、そのためには今何をやればいいのかというところが、どうも描ききれてないというふうに感想を言っておりました。自分たちの近くにロールモデルですね、そういうのが、なかなか提供できてないんじゃないかというところで、先ほどもご紹介しました私たちの活動というのは、子供たちに近い年齢の人で、そしてその地域に住んでいる人もいたりしますので、そういう意味では、ロールモデルを提供できるのではないかなというふうに思っています。机上にこのリーフレットですね、「みんなで木育!!くまもとのづくりフェア」というのを置かせていただきましたが、これは平成22年からスタートして、12年目を迎えます。このリーフレット、チラシは私が作っているんですけど、一番下をご覧ください。この事業は熊本県水とみどりの森づくり税を活用していますと、県の支援を受けてやっているんですが、来年からこの文字もちょっと大きくしたいと思っておりますが、ここの中で、大学生が熊本県内5ヶ所ですね、熊本市も含めて5ヶ所ですが、田舎に行って、子供たちと一緒にものづくりを楽しむというものです。私も天草の田舎育ちで、たくさんの大学生を見たのは、小学校の時に熊大の青い鳥のお兄さんお姉さんたちを見て、大学生ってこんな感じなんだとか、こんな生き生きとされているんだというのを、今でもイメージがあります。そういうのを提供できればというので、こんな活動をしております。ここに来ている学生さんは教員を目指しており、教員になる資質、能力を育成するにもこの活動が役に立っております。今後も、熊大教育学部でできることはどんどんやっていきたいと思っております。そして昨年、県立大学さんと包括的な連携協定も結ばせていただきましたし、今年度からは、前教育長の宮尾先生にも、熊大の理事になっていただきました。いろいろなところで、熊大も関わらせていただいて、地域の子供たちの中、夢の描きですとか学ぶ意義の創出に関わらせていただければなというふうに思っております。以上です。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございます。他の委員の方、よろしいでしょうか。はい、どうぞ木之内委員。

【木之内 教育委員】

今、田口委員からあったように、僕も大学に実際出ていて一番思うことが、就職の時に

何をやっていかかわからないという学生の数の多いことに驚くんですね。いろんな仕事の、例えば内容とかというのが、例えばテレビであったりいろいろな情報元で、ないわけじゃないんですよ。日本なんかそれは得ようと思えばいくらでも、いろいろな情報があるはずなんですね。ところが、それにもかかわらず、大学を出るときになって、どうしていいかわからない。そして、大体仕事に就くのが、自分のせいぜい学生時代にやったアルバイトの範囲内で仕事を見ている。これが非常に多いことに、僕は大学に出てからびっくりしたんですね。どちらかという自分自分の好きな道をやり通してきたタイプなもので、何でなんだろうと思うんですけど、やっぱり実体感が薄いというのを非常に感じます。要するに映画を見ていたり、ドラマを見ている中で、自分のこととしてとらえてきれてない。もちろん演技なんですけど、やっぱり他人事に見ている。だから、例えば震災なんかのいろいろなものにしても、すぐに記憶が薄れていくとか、こういうのもそうで、これ仕方ないと思います。やっぱりその場で、本当に体験しているかどうかというのが、ものすごく僕は大きな要因なような気がするんですね。そういう意味では、今例えば高校でSPHみたいのがあったり、いろいろなところで、学校側も、そういった一般の方々を呼んでの講演会とか、いろんなことに取り組みられているのは十分承知しておりますし、いろんな工夫をしていただいていると思います。でも、それにもかかわらず、学生がなかなか本当の意味で、自分の夢をちゃんと見いだしてないというのも現実だという点で、この方策について、やっぱり僕はもうちょっと検討するべきなのかなという気がしています。一つの要因にはですね、もちろん成績が良くなること、偏差値を上げること、優秀な学校に行くこと、これは大切なことではあるのはもちろんです。ただ、あまりにもそちらにシフトして、要するに何となく給料の金額だったり、もちろん給料が良いにこしたことはないんですけど、あとは今働き方改革という中での仕事のやり方みたいなこと辺りを言いすぎると、今度は、要するに割りの良い人生を渡ろうと、夢ではなく、もうそちらの方に、若いときから意識がシフトしてしまう。これは僕は非常に危険なことだと思っております。やっぱり、どんな仕事をしてたにしても、例えばその内容の充実によって、社会にどの程度貢献できているとか、そういうことになったら最終的に僕は対価はついてくるものだと思うっていて、やはりその工夫をしていくことが、それなりの収入も上げていくという工夫をしていくことが、また一つの勉強であり力だと思うんですね。だからそういった意味では、僕は、この夢を叶える以前に、きちっと夢を追えるような仕組み、ここをぜひ強化していただけたらなと。もともと夢のないところに、何かをやろうと思っても、勉強する気力も出てきませんし、やっぱり早い段階から、僕は、もちろん夢は変わっていてもいいと思うんですけども、小さいときからしっかりと意識を持ってもらうような仕掛けみたいなことというのは、何かもう一工夫あるんじゃないかなというのを感じています。以上です。

【古閑 教育長】

ありがとうございました。どうぞ、西山委員。

【西山 教育委員】

私はこの会議に関わらせていただいて、一番気に入っているといいますか、県の教育プ

ランで、非常に感動というか、気に入っているのは、「能動的に学び続ける力」を身に付けることを目指す、これが本当にそうだと思うんですね。「能動的に学び続ける力」を持ったら、どこでもやっていけるというふうに思います。先ほどの発言にありましたけども、我々の時は偏差値、偏差値と言っていましたけど、偏差値じゃないと思うんですね。もう、いわば一芸入試もどんどん出てきていますから、何がその人の特色か、何に優れているかというものをもっていく。また、それを学び続けていくことがその人の迫力になるし、その人の生き方になるんじゃないかなと思っています。そんな中で、そういう「能動的に学び続ける力」をつけるために、非常に有効なツール、道具として、私は家庭学習ノートですね。家庭学習ノートとICTの活用という二つは、大きな道具になってくると思っています。家庭学習でもICTを使いながら、自ら学んで、いろんな勉強をして、それを学習ノートに書いて、お母さん、お父さんに見てもらおうと。お父さん、お母さんは、どんなICTを見たかというのがわかるから、それを寝る前に1回見てもらおうと。だからみんなで勉強が進んでいくというような、そういうその仕掛け、ICTのソフト開発ですね、ハードは随分と整備されてきてますんで。そういった学び続ける、自分が学びたいときにそこにたどり着けるICTソフトのポータルとかサイトとかそういうものを作っていて、そこに入ればいろんな勉強ができると。いろんな勉強しながら、自分は何がやりたいんだということを、もっと勉強を続けて、そしてその道の大家になっていくというふうな、そういう流れができるように、「能動的に学び続ける力」を身に付けるサポートをできるような体制をお願いをしたいなあと。あと自分のことであれですけど、今いろんなものが世の中にコンテンツとしてあります。実際に社会で使わない、あまり使いませんが、微分積分という言葉を知ったら、昔習ったなと思って探ると、そういうYouTube、10分ぐらいしか見たくないですけども、10分ぐらいのYouTubeがあって、それでこんなことだったんだなとわかりますし、後は、あるいはいろんな資格でも、例えば、宅建の借地借家とはどんな意味かなとみると、いろんなページがあります。そうやって、大人は検索エンジンで探していけるんだと思いますけども、子供はですね、そこまでやらずに、自分のページがポータルに入って、そしてどんなものがあるって、そして絞り込んでどうだということ、たどり着きながらいろんな勉強ができるような、そういうサイトを熊本県で考えていただくと、私もそのサイトに入って勉強したいなと、子供がどんなことを勉強しているのかなと、みんなで学んでいきたいなと。そして子供の学力が上がれば、またこれ恐縮ですけど、先生の力も上がってくると思うのですよね。子供が優秀になったらみんなスーパーティーチャーでないといかんというふうな相乗効果が出てきて、全体の学力向上につながるんじゃないかなというふうに思っています。いずれにしても、家庭学習ノートとICTの活用はぜひ進めていただきたいというふうにお願ひするところです。どうぞよろしくお願いいたします。

【古閑 教育長】

ありがとうございました。他は、どうぞ、吉井委員。

【吉井 教育委員】

2年後の目指す姿にあります、全5教科で全国平均を上回るとか、正答率3割未満の割

合を上げるというのは、これは、目標ですよね、目的ではなく。本来の目的は、子供たちの学力を上げて夢を持たせること、自信を持たせるということであって、それを実現するための目標としてのことを挙げてあるんだと思います。この全国平均を上回るという目標を実現させるためには、低い学力の子供を集中的に支援するというか、教えるというのがとても大事になるのではないかと思います。もともと学力の高い、100点90点を取れる子供の点数をさらに伸ばすのは難しい。でも、点数が低い子は、まだまだ伸びしろがあります。いくらでも伸びていきます。その子供たちを集中的に、教育を支援することで、応援することで点数が上がると、当然、平均点はどんどん上がっていくと思います。そしてそれをする中で、そのままだったら低い点数しか取れなかった子供たちが、伸びることで、「何だ自分はやれるじゃないか」と自信を持ちます。「ああ、自分は頑張ればこんなにできるんだ」と思います。それが、夢を持つことにもつながっていくと思いますので、なかなか学力の低い子だけを特別に集めたというのは難しいかもしれませんし、働き方改革と言っているなかで先生方に新たな負担を強いることになりませんが、これは必要なことだと思います。これをやることで、小学校の早い段階から誰一取り残されることなくという部分に係ってくると思います。どんな子供でも丁寧に教えればどんどん伸びていくということ、それを経験して自分に自信をつけていく子供を増やすということを、この2年間で、ぜひやっていただきたいと思います。

それとちょっと私が興味を持ったのが、中1になったときに学力がちょっと落ちていくという、これの数字にちょっと興味を持っているんですが、例えば、義務教育学校とか、あるいは小中一貫校では、その結果はどうなっているんでしょうか。もし、他の学校よりも、これらの学校で、中1に当たる年代になった時の点数がよかったとすれば、それは今後、地方にある小さな学校の小中連携の推進を考えるきっかけにもなるのではないかなと思うのですが。実際のところいかがでしょうか、お伺いいたします。

【古閑 教育長】

吉井委員のお尋ねについて、事務局の方でわかれば。

【竹中 義務教育課長】

義務教育課でございます。個別の学校名をこちらで出すことは差し控えさせていただきますけれども、小中連携に力を入れて取り組んでいる学校においては、中学校の先生が、小学校に行って教えているという事例もあります。そこでは、中学校の専門的な指導力がある先生が、きめ細かく小学校の子供たちに教えることで、身に付いていないことが身に付いて、その後の学びにもつながっているという事例、データは存在いたします。

【吉井 教育委員】

ありがとうございます。

【古閑 教育長】

他はよろしいでしょうか。

【蒲島 知事】

じゃあ一つ。

【古閑 教育長】

はい、知事よろしくお願いいたします。

【蒲島 知事】

大変貴重な御意見ありがとうございます。今の夢の実現に向けた、そういうのを、最初に、私が知事になって、夢ということを教育の現場に必要なだということを述べて、これが歴代の教育委員長、教育長のもとでやられたというふうに思います。

ただ、夢を持つというと非常に具体例から外れてくるんですね。目標は簡単ですよ。こういう目標を持つと。だから今やろうとしているこの目標は、なんらかの自分の夢を実現するための日々の教育だというふうに分けて考えることが大事かなと。もう一つ先ほど出ていましたけど、とにかく、生涯にわたって学ぶ力を持つことが、多分それが一番大事ですよ。生涯にわたって学ぶ力を持つために、やはり貧困の連鎖で学びの場所がないとか、あるいは今回夜間中学校を作るのもそういう観点ですよ。そういう方々にチャンスを与えると。ICT教育もそうで、このICT教育を持つことによって、知らない世界がいっぱい広がってくると。これは、高校・大学を卒業しても、大人になっても、学ぶ力の源泉になると思うんですよ。必ずインターネットを通して、一生学ぶ力が付くよう、そういうものも、今の中にきちっと置いておくということだというふうに思います。

私アメリカの大学で、例えばハーバード大学なんかで、どういう人が評価されるかというのを見てきました。やっぱり普通の人と違うぐらい頭が良いのが評価されるけど、それだけじゃなくて、それを使って人と違うことをやる人。人と同じようなことの研究をやる人は、ほぼ評価されない。今までやったことのないような研究をする。私が知っている人では、今有名な、女性の社会学者ですけども、芸者の研究をやりたいと。これちょっと日本の大学では考えられませんが、芸者の研究をやるために、多分3年間は芸者の修行をされたんだと思います。そういうふうな方がやっぱり、自分が夢がある、誰よりも誰もやったことがないような研究を通して日本社会を理解したいと。そういう、なんて言いますかね、外国での評価の仕方は人と違うことをすること。それから自分の手でやってみること。本を読んだりして。そういう人がたくさんいることが、やっぱりたくさん夢が出てくるような気がするんですよ。そういう意味では、夢の実現に向けた誰一人取り残さない学びというのも、まさに、いつでも学ぶ力、それを熊本の教育の中でつukれないかなと。それで、最初の私のお願いであった夢という概念を教育に持ってきた。そういう意味では、海外チャレンジ塾というのもありますけども、英語教育日本一という中で、そこに結びつかないところね。英語教育日本一という形で我々は学力向上を頑張っているけど、海外チャレンジ塾に結びついてこない。結びついてくるとね、ハーバードとか、それからプリンストンとか、MITとかそういうところに通る人が熊本から出てくるんですよ。だから高校時代に夢があって、即奨学金もらってそのまま行って、大学院まで行っています。ということで、あんまり私ばかり話すとあれですけども、最後にちょっとだけ。夢ってとても大事なもので、ただ、それは、ただ英語、手段だけ教えてもね。夢に到達できるた

めの学ぶ力とか、社会に参加する力とか、チャレンジする力とか、そしてその夢も、人がやったことのないことをやるという、そういう独自性もやっぱり必要な気がしますので。ちょっとあんまり具体的ではありませんけど、このもう一つの問題である、不登校の問題は、実は私自身が不登校だったので、また書き物かなんかで出したいと思っています。

【古閑 教育長】

知事には最後の方でまたお話いただければと思いますけれども。他、委員よろしいでしょうか。

知事の方からもお話がありましたけれども、我々県の教育委員会としては、その夢の実現ということにこだわって、ずっと今施策を進めております。各委員の方から、まず夢を描ききれてないとか、夢を追えるための力とか、知事の方からも、いつでも学ぶ力をずっとチャレンジとか、社会参加とか、そういう視点でずっと学ぶ力を身に付けるというようなお話がございました。本日の意見を踏まえまして、我々も今一度、夢の実現に向けた取組みについて、しっかりと考えていければというふうに思っております。また、吉井委員からの話がありましたけれども、やはり目標と、この夢というのはある程度分けて考えながら、取組みを進めていければというふうに考えております。ありがとうございました。

それでは、ちょっと時間の方も迫っておりますので、最後の三つ目のテーマ、「みんなから選ばれる『魅力ある県立高校』づくり」について、事務局から説明をお願いいたします。

【井藤 教育政策課長】

はい、それでは、三つ目のテーマである、「みんなから選ばれる『魅力ある県立高校』づくり」について御説明いたします。

資料の3ページをお願いいたします。まず将来像ですが、すべての高校生が夢に挑戦できる魅力ある県立高校、これを将来像としています。

課題ですが、令和3年度の県立高校の定員割れが50校中41校、2,932人となっており、ここ10年で約3倍に拡大しています。次に右側の目指す姿ですが、マンガ関連学科等、特色ある学科の設置等により、高校の魅力が向上している、また、入学希望者が増加した県立高校の学科コースの割合が80%に達していることでございます。

続いて、中段以降の取組みの方向性についてです。まず1の各学校の特色や強みを生かした取組みを重点的に推進するため、(1)ですが、熊本スーパーハイスクール構想として、新たな県独自指定校の設置を検討します。この新たな四つの本県独自の学びの方向性や、スーパーサイエンスハイスクールなどの国指定事業などを生かしながら、スーパーハイスクールとして、各学校の魅力や特色を広く発信していきたいと考えています。また(2)にありますように、特色ある学科等の設置・検討ということで、国際バカロレアの認定に向けた準備、高森町株式会社コアミックスとの連携による、高森高校へのマンガ関連学科設置に向けた検討、防災の学びの導入や普通科改革、学科改編等を検討して参ります。さらに、2の高校間連携や多様なパートナーとの連携による取組みを推進するとともに、3にありますように、地域の期待に応える魅力ある学校づくり、ICT教育日本一の基盤として、(1)では、現在未整備となっている特別教室や職員室、事務室等に無線L

ANを整備し、コロナ禍での分散授業、課外学習、資格取得の勉強会など、児童生徒の学びや夢、目標に向けての支援を進めていきます。また、(2)ですが、中山間地域等の高校と大規模校を結び、遠隔授業を行うくまもとCOREハイスクールネットワークの取組みなども進めて参ります。

最後に、資料の4ページをお願いいたします。三つ目のテーマの関連資料は、下の二つ「入学を希望する生徒が増加した県立高等学校の学科・コースの割合」と、これは二つ目のテーマと重複しますが、「学校における情報化が先進的である地域の数」になります。いずれも直近の動向に変動はございませんが、先ほどご説明した高森高校へのマンガ関連学科の設置準備ですとか、学校情報化の優良校として、新たに熊本西校や宇土中・宇土高が認定を受けるなど、目標達成に向けた取組みを着実に進めているところです。「みんなから選ばれる『魅力ある県立高校』づくり」に関する事務局からの説明は以上です。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございます。それではまた、委員の皆さんから御意見をいただければと思います、よろしく願います。どうぞ吉井委員。

【吉井 教育委員】

先日、芦北高校林業科の授業に、生徒として私参加してきました。まさに生きた授業をしまして、地域に根差した授業といいますか、地域を知り、地域の悩みを知ることで、地域の力になろうという意欲がはっきり見えて、大変魅力のある学校だと思いました。

また、昨日は熊本工業高校の研究発表を、「これどこの大学？」と言いたくなるような充実した内容の発表を聞いてきまして、今の高校って本当にすごいんだと、驚きました。おそらく、多くの学校が今、こういう状態でいろんな魅力を出そうと自分の学校の特色を出そうと努力して、そして、かなり素晴らしい研究結果を上げてきているんだと思います。

問題は、それを誰も知らないということです。魅力化、これは素晴らしいことで、実際本当に魅力ある学校は多いのに、魅力は人が知ってこそ初めて魅力になります。もっともっとPRをしなければならぬ、特徴をうまくPRできないと、誰も知らないまま、ただ魅力を持っただけで終わってしまうことにもなりかねません。子供が少なくなっている今、すべての学校の入学者を増やすのは無理ではあるんですが、それでも県立学校を選ぶ。一部の学校に集中しないで、すべての学校にある程度の生徒が集まるような状況を作るには、ここにはパンフレット、ホームページ、SNSの活用などと書いてありますが、おそらくこれじゃ私は足りないと思います。何か予算があれば、テレビを使う、あるいは県の広報を使う、場合によってはくまモンを使うなどの方法を使って、いろんな学校の特徴、特色をアピールして欲しいと思います。そして、私はたまたま生徒と一緒に授業を受けたのでその中身がわかりましたが、どこの学校でも、中学校の体験入学とかしていると思いますが、体験入学では多分足りないと思います。親も子供も入れて、丸1日中授業というのは厳しいかもしれませんが、1時間でも2時間でも、その生徒と同じ授業を受けてもらうような体験をすると違ってくるんじゃないでしょうか。私はそれで気持ちは変わりました。今はいろんなテレビ番組でアイドルが出るような番組が熊本にあったりもしますので、あいった人たちもうまく利用する方法はないものかとか。1日授業に来てもらって、それ

を1時間番組で放送してもらえとか、そういうことができないかなと思ってしまいました。また、いろんな話をしている中で、「学校のInstagramを作りたい」「でも、人材がないから大変だ」「じゃあ子供にやらせればいいじゃないか」という話も出ていました。今は子供たちの方がこういったことは得意ですので。学校で先生がうちの学校はこういう学校ですと紹介をするInstagramよりも、子供が、実はここが面白いんですというふうなものを作った方が、ひょっとしたら面白いだろうという話で盛り上がってしまったんですが、そういうこともぜひ検討していただいて、子供の目線で、楽しいこと、自分たちがやっていることを、決して真面目だけにならないように作ってもらうのもいいのかなと思います。これだけたくさんの方がこれだけの努力をして、これだけ地域のために頑張ってくださっているんですから、この努力を無駄にしてはいけないと思います。もっともっとPRして、こんなにすごい学校がこんなにたくさんあるんだぞというのを、ぜひ熊本県民に限らず、もう本当に全国に示して欲しいと思います。

まずはそのPRをしっかりと考えて、できればパンフレット以外で、もっともっとわかりやすく楽しいPRをしていただければなと思っております。皆さんの努力が学校の努力が無駄にならないように、ぜひよろしく願いいたします。

【古閑 教育長】

ありがとうございました。西山委員。

【西山 教育委員】

今の吉井さんの発表で非常に興味が湧いたんですけども、熊本工業の発表会が非常に良かった、私も聞きたかったなと思っているんですけど、そういうのってYouTubeか何かに載せていただいて、何時間のかわかりませんが、何かそういう、熊本県高校の発表のYouTubeとかあればですね、後から見させてもらうとか、なんかそういうこともできるし。これは非常に恐縮ですけども、YouTubeで見るときは3倍速とかありますからね。時間がないときはが一っつと見ながら、ここのところゆっくり見たいとかそういう設定もできるんです。今PRが足りないとおっしゃいましたので、その通りだと思いますけども、そういうPRと同時に、公表していいようなものがありましたら、動画サイトというか、YouTubeしか知りませんが、YouTube辺りに一括して載せていただくとは、それを中学生も見ながら、ここ的高校に行くとこんな勉強ができるんだということで、また理解が深まってくるんじゃないかなと。そういうPRと情報公開をですね、進んでやっていただくと、非常に面白いなと。今の熊本工業の見たかったな、聞きたかったなと思いましたので。

問題はそこにたどり着けるかどうかなんですよね。そのPRのところを、教育委員会、教育庁で、何かそういうページがあって、そこに行ったら選べるとか、各高校のそういう発表会がずっとあるとかですね。なにかそういう、たどり着きやすい、そういう仕組みもぜひ、教育庁さんにはお願いしたいなというふうに思います。以上です。

【古閑 教育長】

ありがとうございました。他、どうぞ、木之内委員。

【木之内 教育委員】

今お話があった通りで、結構ですね、いろいろな指定校のものも、いろいろオンラインで載ってはいるんですよ。ただ本当に、たどり着けるかという問題は非常に重要だなと思ってお聞きしました。高校がやっていることを集中的にどこかのサイトできちっと見られるというのが載っていると、かなり出てくるんじゃないかなという気はします。そういうものが、パンフレットとかこういう物も大事ですけど、受験校を選ぶときに、そういうものをむしろツールにする。今の生徒さんは、そういうのは子供たちもすごく敏感ですから、例えば、学園祭とか体育祭なんかのそういうの一つでも、我々も委員でそういうものに出させてもらうと非常に感激したりもありますんで、たどり着きやすいツールを作るといのはすごく重要なことという気はトータル的に感じました。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございます。他、よろしいでしょうか。どうぞ、田口委員。

【田口 教育委員】

資料の右側ですね、3の(2)ですか。くまもとCOREハイスクールネットワークの取組みですが、先週私もこの会議に参加させていただきました。第一高校をキーステーションに球磨中央高校ですとか牛深高校、小国高校に、担当の先生、専門の先生がいらっしゃらない授業を提供したり、スーパーティーチャーと呼ばれる人が、どこかに行ったらそれを別なところでも視聴できる学習できるというものでした。参加された別の委員の方々もかなりこの取組みについて賞賛しておられました。

併せて、もう一つですね。この構想の中には、地元自治体等との関係機関と連携協働する体制の構築ですね。先ほどありました芦北高校さんで、地元の課題に対して探求していくという、それもここに一つ入っているようです。多分学習意欲ですとかその夢という点では、この探求活動で高まる。それをICTを活用して、もっと学べる。私は会議の中で申し上げたんですけど、この二つが両輪としてうまく機能していくと、すごく良い取組みになるのではないかというふうに思いました。ちょっと残念だったのが、事務局さんの方には、まだその二つを上手に連携するということの構想はなかったように思います。ぜひその部分についてはご検討いただければと思った次第です。

併せて、熊本県内には、中学校ですと、ある教科の先生がいらっしゃらないという学校がいくつかございます。そういうところに隣の学校の先生が、授業に遠隔で入るといのも非常に効果はあるだろうなと思いました。実はコロナの中で、今、対面での授業の発表会ですとか討論会がない状況で、私の教科は技術家庭科なんですけど、熊本県の大会も熊本市の大会も附属中学校の大会もすべて遠隔で、そこで先生がやられている授業を視聴できました。四つぐらいの画面があって、生徒さんが討論しているときはそこだけズームアップで見られるとか、意見交換会もできると。これだけのシステムがもう、熊本県内、ICT教育すごく頑張ってきたので、できる状況になっていますので、地方にいて、専門の教育が受けられていない中学生もおりますので、その辺りについても、まずこの高校で、上手にいくシステムが見えてきたら、中学校の方にも広めていただけるといいなとい

うふうに思ったところです。以上です。

【木之内 教育委員】

一ついいですか。

【古閑 教育長】

はい。どうぞ、木之内委員。

【木之内 教育委員】

左側の（２）の特色ある学科のところ、防災の学びの導入というのがあります。これ当然、すごく重要だと思っているんですけど、先日、野尾理事も、遺構ミュージアムが東海大の震災の跡地でできるところにも、ぜひ、教育委員会としても、いろいろ考えていきますということで、お話もいただきました。その中で、僕、これ学びだけじゃなくて、ここに防災の学びと発信の導入みたいに、要するにきちんと防災についてのことを、高校生も含めて発信していくというのをに入れていただけないかなと思います。学校の特徴の良いところは、毎年新しい生徒が来て、毎回学びを繰り返している部分なんですね。ある意味では、この防災とか減災、こういったことというのは、ただ学んで忘れていたんじゃない、いざというときに役に立ちません。熊本では人吉も含めて、あれだけの災害を受けていることと、また、これからも異常気象等で、いつ何時何があるかわかりません。これをむしろ高校という学びの場を使って、一つ発信という部分を一緒にできるような仕組みができれば、県民にとって、また、当然そこで学ぶ高校生にとってもいいんじゃないかなと思いますので、ぜひお願いできたらと思います。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございます。他は、よろしいですか。田浦委員。

【田浦 教育委員】

すみません。ちょっと記憶違いかもしれませんが、テレビで、高校について、生徒が、私たちの学校はこういう学校ですというような紹介をすることってなかったでしたっけ。

【古閑 教育長】

どうですか、事務局。

【重岡 高校教育課長】

高校教育課でございます。テレビを使って生徒たちが学校紹介するというのは、RKKのガンバレガール・マケルナボーイのCMの部分では、定期的に応募した県立高校からの紹介などを放映していただいております。しかし、県立高校単独でのCMまでは取り組んでおりません。

【田浦 教育委員】

ありがとうございます。私たまに偶然見るのが、「Do Youのうぎょう？」というのがありますよね。それぞれの気候風土に合った産物を紹介してくださるのが、すごく面白いと思うんですけど、ああいう感じで、高校についてもやっぱりその生徒の立場でどんなところが魅力なのかというのを発信するというのがあるのもいいのかなと、先ほどの吉井委員のお話を聞いて思いました。そして、この高校の魅力化について、以前資料をいただいたときに、私はそのホームページで、この学校はどういうことをしているのかなというのをちょっと見ましたけど、そこで初めて、ここではゴルフが学べるんだとか、改めてというか初めて知ったことがたくさんありましたので、せっかく魅力化を打ち出しているのであれば、たくさんの方の目に触れる方法をとっていただきたいなというふうに思いました。以上です。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございます。すみません、だんだん時間の方が押して参りましたので、全体を通して、また三つのテーマ以外にも、御意見があればと思いますが。

知事、よろしいですか。

【蒲島 知事】

はい。この会議の悪いところは、時間が短くて言いたいことがなかなか言えないんですけども。

先ほどから出ている、魅力ある県立高校の分については、私はとても教育委員会の努力を評価しています。とりわけマンガ学科というのができたときに、ああ熊本は変わったなと。それで、ゴルフが強い高校もありますし、スーパーハイスクールもありました。それだけじゃなくて、それぞれ強い高校があって、それぞれ連携できる、他の高校がですね。本当は自分はマンガが好きだけでも、他の高校に行っていると。そういう意味では連携できるじゃないかと。高校間の連携もぜひ進めていただきたいなと思います。そしてその連携を呼びかける高校というのは、やっぱりそれだけの誇りが出てくると思うんですね。自分たちのやっていることは、みんなのやりたいことなんだと。そういう意味で、自分たちの魅力を、できればSNS等による情報発信を行って欲しいし、また今日言ったテレビでもいいと思うんですけども、これは教育委員会の仕事として重要な仕事じゃないかなと。自分の高校だけ、行きたい高校だけでなく、全体の連携、これがすごく強みになってくるかもしれないなと、このように思っています。

時間がないので最後にですね、私が目標としている熊本の政治というのは、やっぱり県民の総幸福量の最大化なんですね。そして、それは経済的な豊かさであり、プライドであり、安全安心であり、夢。そういうふうな形で定義していると。じゃあ、くまモンの存在はということかという、くまモンはこの方程式の中に入れて、くまモンがどのくらいEPSHを通して、県民に幸福を与えていたかと。だから、今日のいろいろ、魅力ある高校、それからいじめ、それから安全な学校、一つ一つの要素なんですね。でも本当に熊本県の高校を良くするためには、それがどのくらいダイナミックに動いていくか。それをダイナミックにしたのがこの方程式ですけど。このEPSHというものにくまモンという

想定を入れると、これが、このEPSHを通してどのくらい県民を幸福にしているか。これがdyで捉えられる。dyがくまモンによってどう変わるかというのが下の方程式です。非常に簡単な全微分ですが、くまモンがエコノミー（Economy）にどのくらい影響を与えたかと、そしてそのエコノミー（Economy）がどのくらい幸せにつながったかというのがこの式です。くまモンが出てきて、人々のプライド（Pride）にどのくらい影響を与えたか、それが、このプライド（Pride）が県民に影響を与えている。安心安全のセキュリティ（Security）にくまモンがどのくらい影響を与えたかというのも、ここにある。くまモンが人々の幸せにどのくらい、夢ですね、ホープ（Hope）にどのくらい影響を与えたかというのが、この方程式で表せます。最後に、くまモン自身の存在がどのくらい幸福に影響を与えているかというのが、この方程式に表される。

だから、教育委員会のメンバーの方に、事務局の方々に知って欲しいのは、実は我々はこのダイナミックな、それぞれのなんて言いますかね、魅力ある高校とかいろいろ出てまいりましたが、それがどのようなインパクトで、どのように変わっていくか。dy/dK、この部分をですね、やっぱり常に分析しなきゃいけないんじゃないかなと思います。私たちはこれやっていますという、そうじゃなくて、実際にそれが本当に、熊本の若者たちの夢、希望、学力、そういうものにつながっているか。それを知ること、先ほど情報だけを知っても良くないじゃないかという意見がありましたけど、それを知った後でこれに当てはめることで、自分たちのやっていることがどのように動いているか、そういうダイナミックさを、教育委員会の事務局の方が来ていらっしゃると思いますので、そういうセンスですね、そういうものを知っているかどうか。今までの我々の目標を見るんじゃなくて、目標がどのように動的に動いているかというのを、ぜひやって欲しいなというふうに思います。でも、今まで想像を絶する努力を教育委員会の方はされていると思いますし、いろいろこれまでと違うアイディア、マンガ学科なんかもそうだと思いますけども、それをみんなが認めるというか、喜ぶ、そういう形にこれから動いていけばいいなと大変そう思います。

【古閑 教育長】

ありがとうございました。他委員の方は何か、全体を通してでも結構でございますけどもでございますでしょうか。はい、どうぞ、吉井委員。

【吉井 教育委員】

すみません、先ほど申し上げました、小中連携の話なんですけれども、どうやらやはり小学校と中学校の交流があることで学力が上がるというか、中1ギャップが解消される方向にあるというのが何かデータで出ているようですので、それは各小中学校というか、市町村立学校に、ちょっと働きかけしていただいて、小学校と中学校との連携をもっと進めていただけるといいのではないかなと、ちょっとさっき思ったので一言申し上げます。ありがとうございました。

【古閑 教育長】

ありがとうございました。他はよろしいでしょうか。どうぞ、田浦委員。

【田浦 教育委員】

すみません、ちょっとまとまりがないかもしれません。

先日ですね、娘の3者面談がありまして、勉強に身が入らない、どうしたらいいですかと先生に尋ねたんですよ。そうしたら先生は目標を持つことだとストレートにおっしゃってくださって。先ほど夢っておっしゃっていましたが、将棋の藤井さんとかですね、好きであるということが、突き詰めるためには、すごく原動力になるなというふうに感じることがあります。それに対してする努力を全然苦にならないというか、すごく好きというのは強みだなと思っていて、興味を持つということが、子供にとっては非常に必要だなというふうに思います、その点で、親が果たす役割は非常に重要だなとは思いますが、やはりその親の嗜好に偏ってしまうというか、私は理系が苦手なので、科学の祭典とかですね、研修センターでも何か子供向けにイベントしてくださっていますけど、行った方がいいなとは思いますが、そこに行くことが今までなかったんですよ。なので、子供にも、親とは別の人生を歩んできた人の話を聞くとか、可能性を知る機会をたくさん与えたいなというふうに思います。なかなかその親がそこまでできないことが多いんですけども、いろんな機会をとらえて、人生ってこういう可能性があるんだとか、自分が好きなことというのももっともっとこう、突き詰める機会というのをたくさん持っていたらいいなというふうに感じました。以上です。

【古閑 教育長】

ありがとうございます。他はよろしいでしょうか。

はい、最後は締めで。夢に向けてということで、我々もいろんな形で、まず夢を描くために、やはり子供たちにいろんな刺激を与えたいなということで、実は知事が就任当初から、出前講座ということで、各学校に出向いて、直接、知事のいろんなストーリーをですね、これまでのお話をさせていただいていますし、他のいろんな著名人の方にも学校現場でお話をさせていただくなり、そういう機会を設けながらですね、しっかり子供たちが夢を描き、そして夢に向かって学び続ける、そういった力をしっかりと身につけさせていきたいというふうに考えております。まだまだちょっと時間が足らずに、知事からもちょっとお叱りを受けましたけれども、他に何かご意見ございましたら。

では、最後に知事から締めを。

【蒲島 知事】

訂正で、お叱りということは全くなくて、これまで教育委員会が努力された、いわゆる未知の世界ですね、そういうものに対して、とても評価していますし、これからもそれを、いわゆるダイナミックにやっていただきたいなというふうに思います。

【古閑 教育長】

はい、ありがとうございます。知事からダイナミックにというお墨付きをいただきましたので、我々も人・予算も含めまして、しっかりとこれから頑張っていきたいというふうに思っておりますので、引き続き、よろしく願いをいたします。では、これで事務局

の方にお返しをさせていただきます。

【井藤 教育政策課長】

はい。本日は貴重な御意見をいただき、ありがとうございました。本日いただきました御意見を踏まえ、今後の施策について改めて整理をした上で、来年度の事業化に向けて検討を進めて参ります。それでは以上をもちまして会議を終了いたします。

本日は誠にありがとうございました。